

## 災害パニック

1977年、アメリカ・シンシナティ市郊外のビバリーヒルズ・サパークラブの火災は最初クラブの従業員から火災の情報が伝えられたが、緊迫感の乏しいものであった。従業員や客、出演者ら1,350人も緊迫感に欠けていたため、避難はゆっくりとしたものであった。そうこうしているうちに黒煙が室内に噴出してきた。その結果逃げ遅れた164名が死亡した。これは客たちがパニックを起こした結果大惨事が引き起こされたのであろうか。

●**パニックとは何か** パニックということばは、ギリシャ神話に登場するパンという半獣神の名に由来する。パンは酒好きで色好みという遊び人で、また昼寝を好み、昼寝の邪魔をされると怒り狂って周囲のものを恐れさせたという。そこから、非理性的で異常な行動をパニックとよぶようになった。しかし、心理学ではフロイトのように「こどもの驚愕反応」とする個人的な心理を指摘する人もいるが、多くは「ヒステリックな信念に基づいた集会的な逃走行動」と定義されている。

映画やテレビドラマの事故や火災シーンでは人々が恐れおののき、逃げまどいパニックに陥る様子が描かれている。2004年に起きた新潟中越地震でも最初人々は1995年の阪神・淡路大震災のときのコンビニで品物が散乱した場面や被災地の上をヘリコプターが飛び交う混乱した様が浮かんだという。

しかしここで重要であるのは、人々は混乱していたが、多くの人々はパニックに陥っていなかった。冒頭のクラブの火災においても従業員や出演者そして客もパニックには陥っておらず、むしろ避難への緊迫感が従業員側に欠けていたため客の避難が遅れた。避難が遅れ、黒煙が室内に入ってきたため大惨事となったのである。このように現実ではパニックは生じにくい。それにもかかわらず、災害時においてパニックが生じやすいという誤った考えはパニック神話といわれている。

●**パニックの発生条件** パニック発生の条件について注意すべきことは、いずれも人々の意識の状態と直接的にかかわっているものであり、外部的な客観状況のありようとは、間接的な関係をもたないということである。すなわち、それがパニック発生の条件にかかわることがらである場合には、現実には存在していないことがらであっても、その存在を主観的に確信してしまうと、パニック発生の条件をみとすことになる、ということである。

まず、第一の条件は、緊迫した状況に置かれているという意識が、人々の間に共有されていて、多くの人々が、差し迫った脅威を感じている、ということであ

る。

1938年、オーソン・ウェルズのラジオ・ドラマ『宇宙人襲来』を、本当の宇宙人の襲来と考えた人々は、ラジオドラマを差し迫った現実と信じ、パニックに陥った。

第二の条件は、危険をのがれる方法がある、と信じられることである。もし、絶対に助からない、助かる見込みはない、と確信すれば、我々は、逃走行動を放棄して、諦めと受容の姿勢でその危険を迎え入れるか、背中を向けるのではなく、正面に向きをかえて、討ち死に覚悟の捨てばちな行動をとるかのどちらかだろう。このようなときには、脱出口を求めて、先を争って逃げまどうパニックは起こらない。

第三の条件は、脱出は可能だという思いはあるが、安全は、保証されていない、という強い不安感があることである。例えば、脱出路には狭いなどの空間的な制約があったり、限られた間しか使用できないなど時間的に緊迫した条件などがあって、この脱出はフリーパスではなく、自分自身の安全な脱出は、現実には困難かもしれないという危惧を、多くの人々が共有しているということである。危険が迫っているが、その危険をまぬがれる道はあると信じている人がいたとしよう。だが、もしここで、その人が、危険からの脱出には競争原理が働いて、早いもの勝ち、要領のよいものや力の強いものが有利だと考えたとしたら、どんなことが起こるだろうか。パニックが発生する危険が増すであろう。もし、あせらず、競争意識むき出しで先を争って出口に殺到するようなことがなければ、スムーズに脱出できるかもしれない。にもかかわらず競争に遅れをとることが破滅を意味するという状況の認識が、死傷者をだすパニックを誘発してしまう。

第四の条件は、人々の間で相互のコミュニケーションが、正常には成り立たなくなってしまうことである。狭い出口から、緊急に脱出しようとする人々の間では、コミュニケーションが断たれていることが多い。前の方で子どもや老人が倒れていても、後ろの方では何か起きているのか情報が伝わってこないために、人の流れが進まず、早く脱出したいというあせりから、前の人を、いっそう強く押す。転倒者の上にさらに転倒者が重なり、出口や通路は人の山でふさがれてしまう。

●**パニックの防止策** パニックは稀ではあるが生じる。その際には、先の4条件の1つでも生じないことが必要である。例えば実際以上に危険の切迫度を強調しない。また、ホテルやデパートが避難経路や非常口をわかりやすく表示し適切なコミュニケーションを行うことも必要である。 [水田恵三]

#### □参考文献

[1] 広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのかー災害の心理学』集英社、2004